

平成27年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	アート・コミュニケーションプロジェクト
研究所名	アート・コミュニケーション 研究所（所長 椎原 伸博 教授）
設置開始	2014. 4. 1
設置終了	2017. 3. 31

■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

研究初年度は、シンポジウムとワークショップを各2回行ったが、本年度は昨年キャリア向けワークショップでお世話になった、認定 NPO 法人芸術資源開発機構の三ツ木紀英氏(美学美術史学科 OG)を講師に迎え「対話型鑑賞コミュニケーター(ファシリテーター)養成講座」を開いた。この講座の目的は、対話を通してビジュアル・アートを読み解く手法を学び、ファシリテーターとして実践する活動を通して、学生のコミュニケーション能力の向上を目指すことにある。ファシリテーターとして学ぶことは、主体的に場をつくる力や、話し手の言いたいことを深く理解し、整理して話をまとめる協調性やコミュニケーション力が育成されるので、本研究所の達成目標に直接関わるものであった。

講座は夏期休業中の8月21日(金)に開講し、その後8月26日(水)を基礎編とし、秋 Semester 開始以降は演習編として土曜日(10月31日、11月21日、12月12日、12月19日、1月31日)に講座を開き、実際の美術館における研修に備えた。その後、東京都美術館で開催される「都美セレクション 新鋭美術家 2016」にて研修することに決まり、3月2日(水)に下見(作品選定、ルート確認等)をして、3月8日(火)に実地研修を行った。

その他以下の実地調査を行った。NPO 法人 BEPPU PROJECT 関連事業の調査(椎原)、中之条ビエンナーレの調査(椎原、下山)、アーツ前橋調査(椎原、下山)、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」と静岡県の文化政策事業の調査(椎原、神野、下山)、水戸美術館「田中巧起 共にいることの可能性、その悩み」展調査(椎原伸、椎原晶)、滋賀県アールブリュット関連調査(椎原)、新潟市美術館(椎原)、京都工芸繊維大学(椎原)。

本年度の主たる事業は、「対話型鑑賞コミュニケーター(ファシリテーター)養成講座」であったが、この事業は次年度には渋谷区立松濤美術館での、実地ワークショップへと展開する予定で有り、研究計画にあった大学と地域社会との連携に対しては、見通しがたち、研究の進捗状況は進展した。

本年度は、高田、工藤研究員の研究参加がスケジュール的に合わず叶わなかった、次年度は全員体制で研究を遂行することを目指す。実地調査を行った研究員の研究実績は、本年度はまとめることが出来なかったため、次年度の報告書等で対応する。

■現在までの達成度

本年度実施した「対話型鑑賞コミュニケーター(ファシリテーター)養成講座」は受講学生の満足度も高く、研究の達成度は高かった。また、実地調査は地域社会における高齢化、空き家、人口流出といった問題に直面するものや、障害者などの社会的弱者における芸術の可能性に関するものを中心に行っている。いわば芸術の社会包摂に関する問題意識に対しては、研究員全員が共有し、各研究員の研究の達成度は高まっている。

しかし、当初の予定にあった渋谷地域の様々な組織との連携は進展していない、また産学協同事業の提案は困難な状況にある。ただし、渋谷区立松濤美術館との連携事業に関しては次年度に達成出

来そうである。

■次年度以降の研究（見込み）

次年度は、まず「対話型鑑賞コミュニケーター（ファシリテーター）養成講座」のワークショップを、渋谷区立松濤美術館で開催する予定である。また、併設校の 28 年度事業計画にある「感性表現教育研究の充実」に対して、何かしらの連携を提案していきたい。次年度は、当初の研究計画の研究最終年度にあたるため、過去二年間のワークショップやシンポジウム、実地調査の内容を精査し、最終的な研究報告書にまとめる。また、最終的には研究員全員が出席する、シンポジウムを開催し、その研究成果を社会に還元する予定である。

■研究活動における成果

(1)研究成果（雑誌、学会発表、図書等）

研究成果については、「実践女子学園アート・コミュニケーション研究所 平成 27 年度事業報告書」を作成した。報告書には、実地調査の報告と、「対話型鑑賞コミュニケーター（ファシリテーター）養成講座」の報告を行った。後者は事業概要、具体的な実施講座受講生による基礎編と演習編の講座内容説明、実地研修の概略、受講生の感想文を提示すると共に、事業総括を行った。

それ以外の研究成果としては、神野真吾研究員は研究成果を「社会の芸術フォーラム共同代表」「千葉アートネットワーク・プロジェクト代表」等の活動に活かした。椎原晶子研究員は、アサヒ・アート・フェスティバル 2015 に参加した「でんちゅう Days～Live Arts and Archives」などの活動に活かし。下山肇、織田涼子研究員は、自身の実技制作等に研究成果を還元している。所長の椎原は日本アートマネジメント学会の研究誌や学会で研究成果の還元を行っている。

(2)学生・生徒の教育及び支援に関する還元

「対話型鑑賞コミュニケーター（ファシリテーター）養成講座」では、当初は募集人数を 15 名のところ、16 名の応募があった。全学的に受け入れる予定ではあったが、告知のタイミングや学生の関心度に原因し、受講者は美学美術史学科学生と大学院美術史学専攻の学生で構成されることになった。その内訳は、大学院 2 名（M1 と M2 それぞれ 1 名）と、学部は 4 年 1 名、3 年 10 名、2 年 1 名、1 年 2 名であった。最終的には、東京都美術館にて実地ワークショップを開催し、14 名の学生が対話型鑑賞ファシリテーターを体験した。参加学生の感想文をみると、約半年の訓練で自身のコミュニケーション能力の向上を実感しており、教育的効果は高かった。